



PRIDE AND PREJUDICE

BY

JANE AUSTEN

WITH INTRODUCTION AND NOTES

BY

MITSU OKADA

PROFESSOR OF ENGLISH IN THE WOMEN'S HIGHER NORMAL SCHOOL
OF TOKYO

TOKYO

KENKYUSHA

1929

KENKYUSHA ENGLISH CLASSICS



研究社英文學叢書



大正十二年三月十五日印刷 大正十二年三月二十日發行
昭和四年三月二十日印刷 昭和四年三月二十五日訂正三版發行

主 幹 者 岡 倉 由 三 郎

主 幹 者 市 河 三 喜

發行兼印刷者 小 酒 井 五 一 郎
東京市麴町區富士見町六丁目五番地

印 刷 所 研 究 社 印 刷 所
東京市牛込區神樂町一丁目二番地

發 行 所 研 究 社
東京市麴町區富士見町六丁目五番地
電話九段四〇二・四〇三番
振替口座東京二八六〇一番

非 賣 品

新 榮 社 製 本 所

序

Pride and Prejudice の作者 Austen 女史は Shakespeare に比すべき腕を持つてゐたご、先生から話された時に、私には、ごこがうまいのたか解らないで、不思議に思つたのは、もう何年も何年もの昔になります。その後この作家のものを澤山讀む機会もなくて過ぎましたが、昨年の春 *Pride and Prejudice* の註釋と解題を書いてはこの御相談を受けて、柄にもないのに、御引受けしてしまひました。兎に角一所懸命にして纏めなくては濟まないご思ひ、昨年の夏から取かゝつて、やつご、この三月末に了りました。了つた時には重荷が下りたやうな氣がして、さすがに嬉しかつたのですが、さて一方に、出来上つたものを見ますご、之が半年以上を費した努力の結果かご、自分ながら厭(*)になりました。もつご學力のある、もつご頭腦のよい人ならば一ヶ月位で、しかも、もつご優れたものを書き上げるたらうにご考へますご、恥かしくもまた情ない氣がしました。併し岡倉、市河の御兩君が懇切に眼を通し筆を加へて下すつたのですから、たごひ、土臺の拙いのはごうする事も出来なくても、私ごしては、幾分心を安くしてもよいかご思ひます。ごうせ未熟者の私の書いたもの故、届かぬ點が澤山あります事でごせう。この段は、いくへにも讀者の御寛恕を願ひます。

私自身ごしては、御蔭で Austen 女史のあらゆる作品を讀んだり、その傳記や評論に眼を通したりする機會が出来て、女史について、言ひやうのない親しみを覚え、*Pride and Prejudice* に對しても、今までご異つた面白味を感じるやうになつた事を感謝してゐます。この叢書で *Pride and Prejudice* に御接しになる方が、なほ

深くこの作家のものを讀んで見ようとの希望を抱かれたら、嬉しい事だと思ひます。

ついでに、註釋の中に (F.S.) としてあるのを一言説明して置きます。Ginn and Co. から出てゐる Standard English Classics の中の *Pride and Prejudice* に、Frank Sicha さいふ人が六頁程 notes を附けてゐます。それが簡單で要を得てゐますから、それをそのまま書入れたさいふ意味なのであります。

大正十二年四月

岡田 美 穂

INTRODUCTION

I. 作者小傳

Miss Austen は、唯六冊の小説に由つて、その當時は兎に角、今は十九世紀初期の小説家の一人として押しも押されもせぬ立派な地位を占めてゐる。それでゐて假りに女史から作家としての genius を除(≒)つてしまつたなら、その生涯はその時代の普通の English girl と何等變はつた事のない平凡なものであつた。女史の傳記の材料は甚だ乏しくて、女史の甥 Mr. James E. Austen-Leigh の *Memoir* と女史の姪の子 Lord Brabourne の集めた *Letters of Jane Austen* と Messrs. J. E. and R. A. Austen-Leigh の *Life and Letters of Jane Austen* 位が主なものである。

Jane Austen は 1775 年に生れた。1775 年といへば歴史上特筆すべき事件、即ち米國が獨立戰爭を起こした年で、又英國の有名な畫家の Turner 及び essayist の Charles Lamb が生れた年である。Jane はその年の十二月六日に英國の南部 Hampshire の Steventon といふ田舎の村に生れた。父 George Austen は Steventon の牧師であり、又近くの Deane といふ地の牧師をも兼ねて居た。母は Cassandra Leigh といつて、その父 Thomas Leigh も亦牧師であつた。George Austen は Oxford の St. John's College の Fellow で、學識のある風采の立派な人たつたので、Oxford では “handsome proctor” と呼はれた程たつた。

Jane は男六人女二人の八人兄弟の七番目の子であつた。最長兄が James、次が病弱の男兒、その次が Edward と Henry、次が Cassandra といふ姉と Francis いふ兄、それから Jane、あさが

Charles さいふ弟であつた。James は學問の出來た人で、後に牧師になり、Edward は親戚の Knight 家へ養子に貰はれて、後に Hampshire の Chawton House 及び Kent の Godmersham Park を相續し、姓をも Knight と改めた。Henry は餘り出世をしなかつたが Francis と Charles は海軍に入つて二人とも Admiral まで經昇つた。Cassandra と Jane は唯二人の姉妹で、年も三つ違ひ位なつたので、仲の好かつた事は一通りでなく、死ぬまで同じ家同じ室に起居してゐた。Cassandra は目鼻立ちが整つて Jane よりも一層美人であつて 1795 年に Thomas Fowle さいふ人と婚約が成立つたのに、不幸にもその人が二年後に West Indies で病死したので一生獨身で過ごした。

Jane が生れた時に、後世に名を揚ぐべき非凡の兒(子)が授かつたことも知りようのない父は、十二月十七日に「こんどはまた女兒、Cassy に丁度よい玩具で又將來(の)の好い相手たらう。こんどの子は Jenny さいふ名に定めた」と記してゐる。その頃の風習で、子供は乳離れをするさ一年か二年里子に遣つたものなので、Jane もやはりまる二歳になるまで他所に預けられてゐたが、やがて歸つて來て賑かな大家内の中で育つた。Austen 家は富裕さいふ程でもなかつたが、相應に暮してゐて、殊に親子兄弟仲の睦まじい圓滿な家庭であつた。母親は次々生れる幼な子がある爲、大きい子供達の面倒を見ることが出来なかつたので、Cassandra と Jane は、すこし大きくなつてからは、互に助け合つて身のまはりの始末をした。而して大きい兄達の學習してゐる事を見たり、話し合つてゐる事を聞いたりして自然に啓發された事が多かつたらうと思はれる。Austen 家の大勢の子供の他に、預かり子もあつたので、一同で演劇めいた事をやる事が珍らしくなかつた。Jane もその中に入つて役を演じたり狂言の筋を書いたりした。“The Mystery — an Unfinished Comedy” さいふ名で Jane が十歳にならぬ頃に書

いたのがあるさ *Memoir* の中に誌してある。その頃の教育は今の所謂教育さいふ程度のものでなかつたので、殊に女兒であつた Jane は、兄達から家庭でいくらか教を受け、それから Cassandra が Reading さいふ所の女學校へ入學した時に、姉を離しておくのは不惑たこの理由で、一所にその學校へしばらくやられた。Jane の受けた學校教育さいふのはそれ位のものであつた。その後は讀書によつて獨りで學んだものと思はれる。好んで讀んだ書物は Richardson, Fanny Burney, Anne Radcliffe の小説たの、Scott, Crabbe, Cowper の詩などであつた。France 語をも學び、ピアノも少しは弾いたらしく、歌なごを美い聲で歌つた。

Jane は何歳の頃から筆を執るやうになつた確かに分らぬが、1796年 即ち廿一歳の時に Elinor and Marianne さいふ題で *Sense and Sensibility* を書き、それから First Impressions さいふ題で *Pride and Prejudice* を十ヶ月で書き上げ、次の二年間に *Sense and Sensibility* を修正し *Northanger Abbey* を書いた。もつとも、書くさいつても Jane は作家らしく書齋を持つてゐたり、執筆の時間を定めたりしてゐたのでなく、家族を雜居して用事の隙々に人知れず書いたので、誰も Jane が著作をしてゐるなごは氣付かぬ程であつた。父は *Pride and Prejudice* の原稿を Cadell さいふ London の本屋に送つたがその原稿は直ぐ返へされてしまつた。*Northanger Abbey* は 1803年に Bath である本屋が 10 pounds で買つたが、見込がないと思つたかその儘仕舞ひ込んで置いた。それが後に同じ金額で Jane の兄 Henry に買戻された。Jane は自分の著作が出版にならぬのを餘り氣に掛けて失望する風もなかつたが、この三冊を第一期の作として區切り得る程暫らく後を書かなかつた。

二十三歳になつた Jane Austen は、attractive な人好きのする娘であつた。丈がすらりさ高く細そりさして、歩き方の軽く確かりした所謂「姿の美い人」であつた。顔は light brunette さい

ふ質で、色白ではなかつたが肌理(きり)が細かく血色が殊に好く、圓い頬を櫻色に染めてゐた。褐色の髪が自然に卷毛を成して顔の邊りに掛かり、それに釣り合つて眼の色も“hazel eyes”といふ褐色ので、鼻と口とはちんまりと整つてゐた。そして物腰しとやかな聲の特に sweet な人であつたといふから、容貌だけでは、あんな皮肉たつぷりの小説を描くどころか、社交界に持て囃やされる罪のないお嬢さんさしか思はれない。

さういふ令嬢らしく Jane Austen は姉の Cassandra と盛に舞踏會なぞに出たので、彼女から姉への手紙にはその事が澤山載つてゐる。その頃の dance は minuet といふ種類のもので、今の waltz はやつと流行しかけたところであつた。Jane は何處の dance へ行つて二十回舞踏したさか、又その時は八つしか組が無かつたさか、誰誰と partner になつたさか、又男子の数が不足で女同士で dance をしたさか、さもさもそれに興味を感じたらしく手紙に書いてある。1808 年即ち Jane が三十四位になつて自分が dance をする年齢でなくなつた頃でも、やはりさういふ席へ出てゐたと見えて“*The melancholy part was to see so many dozen young women standing by without partners..... It was the same room in which we danced fifteen years ago. I thought it all over and in spite of the shame of being so much older, felt with thankfulness that I was quite as happy now as then.....*” といつてゐる。

衣服の事も Jane の心を随分占めて居た事で、一ヤード七シリングの checked muslin を買つたさか、古い muslin を染めにやつたが約束はかりして染物屋が染めて來ないさか、こんごあの黒い着物に黒のリボンで飾りを付けようと思つてゐる、なぞいふ類の事が多く手紙に書いてある。これでは、どう考へても舞踏と衣服より他に屈託のない娘さしか考へられぬ。

家庭に於ても Jane は娘らしい娘であつた。手先の器用な人だ

つたので何でもよくした。Jane の作った “housewife” や scarf は機械で作ったやうたさか fairy からの贈物たさか言はれた位巧妙な出来であつた。Game なども誰よりも上手であつた。家事の切盛りも母親が身體が弱くて自らしなくなつてからは、姉の留守の時など Jane が引受けてやつてゐた。また、小さな甥や姪に對しては Aunt Jane として人望があつた。一人の姪は「自分は幼い頃 Aunt Jane が大好きで、家の内でも、外でも、どこへでも後をついて歩きまはつたものた。母から Jane 伯母さんの邪魔をしてはいけないと注意された事があるので、それを記憶してゐる」と言つてゐる。Jane は小さい人達を可愛がつて、その相手になつて game をしたり面白い話を考へて、二日も三日も續きものにして語り聞かせたりした。であるから Aunt Jane は子供達にはなくてならぬ人であつた。

斯ういふ美しく、女らしい仕事が好きて、社交的娛樂に興味を持つた Jane Austen が何故結婚しないでしまつたかは不思議の事である。Tom Lefroy といふ人と Jane は親密であつた事が手紙の中にあるが、婚約する程度にならないで了つたといふ。Lefroy は後に Ireland の Dublin の Chief Justice になつて、九十何歳まで長生をした。又 Cassandra の證言に由るに、「或夏海邊に Cassandra 姉妹が行つてをつた時、心安くなつた男が Jane に熱中して再びきつと御目にかゝるつもりたといつて別れたが、その後間もなくその人が病死してしまつた」と。その他一二件かうした噂はあつたやうだが確でない。『*Mansfield Park*』に出て來る Fanny Price が心密かに Edmund Bertram を愛してゐたあの心中は實際の經驗を持つた人でなくては書けないといひ、また *Persuasion* の中の Anne Elliot が Captain Wentworth を忘れかねて長い年月思慕してゐるあれが Jane の實際の心の状態であらうといふ説もあるが、Jane Austen 程の天才ならば經驗はなくてもあれ位の心持ちは直

覺的に感知して書きうるこゝも思はれる。要するに事實の證據がないのにあれこれ推測するのは効のない事である。

Jane は二十五歳まで Steventon にゐたが、1801 年に父 George Austen は身體が悪いといふ理由で rector の職を長男に譲り、一家を擧げて Bath へ移つた。Bath といふ處はその當時でも有名な養生地で、閑で金のある人が保養がてら遊びに行き、そのの鑛泉の水を飲み又賭博などを盛にしたところであつた。その Sydney Place といふ處に Jane の一家は住居した。Bath は人の出入りが烈しく Steventon のやうに心が落付かなかつたせいも、世相を観察する機會は多くあつたものと思はれるが、この間に Jane は殆ど何も著作をしなかつた。*The Watsons* といふ作りかけの小説の用紙に 1803-4 年の渡込があるので、この時期のであらうかといはれてゐる。1805 年に父が病死した。それで母と姉と Jane と三人で Southampton (Hampshire) に移り、その Castle Square といふ所に住んだ。1809 年に二番目の兄 Edward が Knight 家の當主になつたので Hampshire の Chawton House に附屬してゐる Cottage を提供してくれた。Jane 等はそこへ移つた。Chawton は Winchester (Winchester College のある) にも 20 哩位、また Jane の生地 Steventon にも遠くなかつた。それに Chawton Cottage は Manor House から一哩の四分の一位の近さであつたので、Manor House から Edward 夫妻が Cottage へ食事に来たり Cottage の方から Manor House の方へ招かれていつたりして Jane 達の生活は愉快な平和なものたつた。Jane のその頃の仕事の主なものは、創作とその出版であつた。先づ *Sense and Sensibility* と *Pride and Prejudice* とを整理して 1811 年に Mr. Egerton といふ publisher の手で *Sense and Sensibility* を出版した。得た金が 150 pounds であつたといふ。*Pride and Prejudice* は二年後に出版された。新作としては第二期のといふべき *Mansfield Park* と *Emma* と *Persuasion* と

を 1811 年から 1816 年までの間に書いた。そして *Mansfield Park* を 1814 年に、*Emma* を 1816 年に出した。*Persuasion* と *Northanger Abbey* は著者の死後 1818 年になつて出版された。之等の小説は何れも匿名で世に出されたのであるが、その秘密は永く保たれなかつた。されはさいつて、作者の名が高くなつたのでもなく、女史が出版上の用向きで London へ行く事があつても、文壇知名の人に面會したり招待されたりするなどの事はなかつた。Sir Walter Scott (1771-1832) や Macaulay (1800-59) が女史の作を激賞したにも拘らず、作者はそれを知らずに世を去つてしまつた。唯だ 1815 年に兄の Henry が大病に罹つたので、その看護に女史が London へ行つて居た時、兄の許へ来る醫者が宮中の侍醫であつた關係から、女史の事が時の攝政の prince (後に George IV.) の耳に入つた。殿下はかねて女史の小説を好まれて、ごの別邸にもその作品を備へられた位なので、女史が上京中の旨を聞かれて Carlton House の圖書掛り Mr. Clerk を遣はされて、特別の思召で皇室圖書館の參觀を許されるさういふ事さ、また近頃出版される小説があるなら殿下に捧げるやうにこの思召を傳へられた。それで女史は *Emma* を殿下に捧げた。

兄の病氣の看護やら、その財政上の失敗の影響やらで 1816 年頃から女史は身體が悪くなつて來た。散歩の道程を段々短かくし、次には馬車で運動に出るやうになり、その次には家内の用も物うくなつて長椅子にのみ横はるやうになつた。1817 年五月に、然るべき醫師の診察を受けるがよいさういふ事になつて、女史は Winchester に行き、姉と共に間借りをした。醫師は望みあり氣に言つたが實は本復の望は絶えてゐたのである。女史は手紙には快癒するつもりらしく書いてゐたが、心では死を覺悟してゐた。五月に甥の一人に與へた手紙(女史の大方最後の手紙)の一節に “There is no better way, my dearest E. of thanking you for your affectionate

concern for me during my illness than by telling you myself, as soon as possible that I continue to get better. I will not boast of my handwriting; neither that nor my face have yet recovered their proper beauty, but in other respects I gain strength very fast.” ご健氣に言つてゐた。女史にさつては世の中は捨てがたかつたに相違ない。家庭に苦勞がなく、自分の事業は成功の曉に達し、才筆を揮ふさいふ大なる樂みがあつたのであるから、もつと長く生きたかつた事と思はれる。看護をしてくれる母や姉に對して、思ひやりも愛情も深く、その勞を謝し、氣分のよい時には冗談をいつて心配さ不安の裡に居る人々を翼じさせた。終焉近くなつてからは愛情を口にも筆にも遠慮なく出すやうになつて “As to what I owe her (姉のこゝ) and the anxious affection of all my beloved family on this occasion, I can only cry over it and pray God to bless them more and more.” と書いてゐる。人々の心遣ひの効なく女史は 1817 年七月十八日に歿した。年が四十二であつた。Winchester Cathedral の中に黒大理石の扁平石の下に葬られてゐる。

Austen 女史は快活な、ものに屈託せぬ質の婦人であつた。Walter De La Mare は “It was her business to be satisfied, her temper to be happy.” と評をしてゐる。人世をあるがまゝに受け容れてそれに興味を持ち満足もしてゐた。非常な落膽に陥つた事もなく、甚しい憂き目に逢つた事もなく、幸福に世を渡つた人であつた。そして女史の特質さといふべきものは Charlotte Brontë のやうな熱烈な感情家たる點でなく、Hannah More のやうに道徳的たつた點でなく、又崇高の理想があつたさか信仰があつたさかいふのでなく、その satirical humour の點であつた。女史は人間の弱點即ち利己心の強い、虚榮心の憂こつてゐる、不正直な卑怯な點を洞察し、それを可笑しく思ひ、それを言ひ表はすのに妙を得てゐたのである。されはさいつて女史は人間を忌み嫌ひ、その短所を冷

笑するのではなかつた。人間の弱さ不完全さをどこまでも承知してゐてそれに同情をしてゐながら、それを興がる方が強かつたのである。作品を読んでも知れる通り冷酷無情の人をは鋭い語を以て容赦なく罵つてゐるが、愚鈍な人、野卑な人、お人好しの多辯者などには只憫笑を與へてゐるばかりである。女史が心の優しい愛情の濃やかたつた點については、Cassandra との關係を考へても知られる。母親が戯れて「もし Cassandra が首を刎ねられるやうな場合には Jane もきつとお附合ひに首を刎ねてもらうたらう」と言つた。又 Chawton Cottage で唯一つある sofa は母のものとなつてゐたので、女史は身體が衰へて椅子に掛けてゐるのも大儀になつた頃でも、その sofa を使はず、椅子を二つ寄せ合せて、そこに横になつてその方が居心地がよいと言つて母に遠慮をしてゐた。家族の中にも優越感を抱いて威張るなどの風が少しもなかつた。何處でも大立物扱ひをされるのが嫌ひな人であつたから、世間からも餘り知られないでしまつたのである。兄の Henry は “She never uttered a hasty, a silly or a severe expression.” といつてゐるし、姪の Caroline Austen は “I do not suppose she ever in her life said a sharp thing.” と言つてゐるが、あれ程慧眼で人の短所に氣付いた女史が “sharp things” を言はなかつた筈はないが、かういふ思ひ出のあるのは、彼女をよく知つてゐた身内の者には、女史の心の優しさの方がより深く印象されてゐた證據である。

II. 作品の梗概

1. *Pride and Prejudice.*

之は Austen 女史が自分で “her own darling child” といつた作で、また一般にも最傑作たさされてゐる。女主人公 Elizabeth の gay で sparkling wit のある點など Austen 女史自身の面影がある。

Mr. Bennet は Longbourn さいふ村に住んで、年頃の娘を五人持った gentry 階級の紳士であつた。Mrs. Bennet は娘の婿選みをするより以外に何の考もない愚かしい人であつた。良人は妻の愚劣に愛想をつかして書齋にはかり引籠もり、家内のものに皮肉と冷笑を浴びせて憂さを晴らしてゐた。話は Bingley さいふ財産のある獨身の若い男が Netherfield さいふ邸を借り入れて住むやうになつたところから始まる。Mrs. Bennet は早速良人を勧めて Bingley を訪問させようとする。良人は口で不承知を唱へながら妻子に知らせずに Bingley を訪ひ、斯うして Bingley 家との交際の端緒を作る。Longbourn から遠くない Meryton さいふ market town に舞踏會があつて Bennet 家の五人の娘も出席した。長女の Jane は容色のすぐれて美しい、性質の極く温良な娘なのですぐ Bingley の眼に留まり、彼女は彼と一度ならず dance をした。Mrs. Bennet は大満悦であつた。Bingley の親友の Darcy さいふ金満家で人物の優れた男も舞踏會に出てゐたが、室内の人々を見下けて dance をしようともせず、Jane の妹の Elizabeth の容色を貶したり、彼女が partner なしであつても「一所に dance してやる程の女が居ない」など、高言を吐いてゐた。それで Elizabeth は Darcy に對して僻見を持つやうになつた。

Bingley の姉と妹の Mrs. Hurst と Miss Bingley は高慢な意地のわるい女達であるが、Jane を可愛がつて Bingley 家に招いた。そこで Jane が病氣に罹つてしまつて止むを得ず四五日逗留する事になり、Bingley との間がますます親しくなつた。Elizabeth は姉の病氣を看護する爲に Bingley 家に来て、彼女も亦 Darcy に接する機會が出来た。Darcy の方では始めは Elizabeth に注意を拂はなかつたが、その眼の美しいのたの、賢くて氣の利いた事を言ふのに惹き付けられて彼女に近づかうとする。が、Elizabeth は Darcy の傲慢不遜な態度に反感を懷いて、折があるごとに反抗するやう

な事を言つた。Miss Bingley は自分が Darcy に氣があるので、Elizabeth を貶(おとし)めて Darcy に彼女を悪く思はせようとした。Mrs. Bennet が妹嬢を三人連れて Jane を見舞(みまひ)に来、愚さを遺憾なく見せつけて Elizabeth の眉をひそめさせる。Jane は病氣が快くなつて Elizabeth と共に歸宅する。

その頃 Meryton に軍隊が駐屯してゐたので Bennet 家の年下の娘 Kitty と Lydia は士官達の伊達姿に夢中になつて、毎日のやうに Meryton の伯母の家に行つたり、買物にかこつたりして、軍人達に交際を求めた。Elizabeth も Wickham といふ風采のよい年少士官に遇つて、たんだん親しくなる。Wickham は自分と Darcy とは同じ家で育つた間柄であるのに Darcy の爲に不親切極まる待遇を受けて、今は斯うして軍隊にゐるのたこ話した。それで Elizabeth の Darcy に對する感情は一層悪くなる。

一體 Bennet 家に男子がないために、その estate が Mr. Bennet の死後 Mr. Collins といふその従兄弟に譲られることになつてゐた。Collins は Kent の Hunsford の牧師たつたが、尊大で愚鈍で阿諛(おご)者であつた。この男が二週間の豫定で嫁を探しにきて Bennet 家へ来て、都合よくは Bennet 家の娘を貰ふのたこの意をほのめかした。丁度その時 Bingley 家に舞踏會があつて Bennet 家一同、Collins までも招待された。Bingley は Jane とばかり dance をして、もう結婚の申込みをするばかりの親しさになつてゐた。Elizabeth も所望されて Darcy と dance をした。ところが Mrs. Bennet は Bingley が Jane の婿さ定まつたかのやうに吹聴し、Collins は Darcy に媚び、Mary (Elizabeth の妹)は遠慮もなく人々の前で下手なピアノを弾いて得意がつた。それらを見てゐた Darcy は Bennet 家の人々の無作法に興を醒まし、その翌日 Bingley 一家を勸めて急に Netherfield を引拂はせた。Jane は失望し Elizabeth はそれを Darcy の所爲故と推して彼を怨んだ。

Collins はやがて Elizabeth を見込んで妻になつてくれといつた。Elizabeth は斷然拒絶した。そこで Collins は Elizabeth の友人で打算的な Charlotte Lucas と結婚する。Mrs. Bennet は Jane の縁談も物にならずにしまひ、Elizabeth も Collins をはねつけてしまったので頗る不平である。丁度 London に居る親戚の Gardiner 夫婦が Jane を招いた。Jane は喜んで London へ行つたが Bingley に逢ふ事もなく快々としてゐた。Elizabeth も亦 Collins 夫婦に招かれて Mrs. Collins の父 (Sir William Lucas) や妹と一所に Hunsford に行つた。この Rosings といふ邸に Darcy の叔母 Lady Catherine が娘と一所に住んでゐた。Collins はこの夫人の領地内の牧師をしてゐた關係から Elizabeth も Rosings に屢々招かれた。そして丁度來遊した Darcy とその従兄弟の Colonel Fitzwilliam とに逢つた。Darcy と Fitzwilliam は代るがはる Collins の宅へ訪れて來た。Elizabeth は Fitzwilliam から Jane を Bingley から引離した人は Darcy だと聞いて立腹し、また Jane から悲しげな手紙が來たので鬱々いであるところへ、Darcy が唯一人訪ねて來て結婚を申込んだ。身分の相違や、Elizabeth の母妹の愚さを考へて、いくさか思ひ切らうとしたが、Elizabeth を愛する情が強く我慢が出来なかつたこと Darcy は言つた。Elizabeth は驚喜と感謝とで承諾するかと思ひの外、彼女は Darcy の自負心の強いのを罵り、Wickham に對する無慈悲の行ひを詰り、Jane を失戀に陥らせた罪を責めた。Darcy は案に相違して立腹して去り、翌日 Elizabeth が散歩してゐる所へ來て手紙を渡して去る。その手紙によつて Wickham の方が悪人で Darcy に不都合のなかつた事、Bingley を引離したのは Jane に愛情がないやうに Darcy が考へたからだと知り、Elizabeth の心が大分解ける。Jane も Elizabeth も歸宅する。

Elizabeth は Gardiner 夫婦と一所に Derbyshire へ旅行に出た。途中、主人不在と聞いて Darcy の邸 Pemberley を (公衆に開放